

潜在的態度の変容可能性の検討

—IAT 研究のレビューから—

藤 井 勉

1. 本レビューの背景—自動性研究の台頭—

人は、自身が行った行動の理由は、自身ももっともよく理解していると思いがちである。人格が完全に統一され、すみずみまで自己制御が効くという考えは、近代西欧の人間観の中核であった（下條，2008）。しかし、近年の認知心理学や社会心理学の研究から、その「常識」は覆されたと言って過言ではあるまい。知覚や認知、評価や感情、そして目標や動機が自動的に生起するという自動動機論（Bargh, 1990）のもたらした影響は大きく、オートマティシティ革命（池上，2001）とさえ呼ばれるほどである。

たとえば、Newman & Uleman（1990）は、実験参加者に対し、事前に特性語のプライム（ポジティブ／ネガティブ）を呈示したのち、特性を示唆する行動記述文（ポジティブにもネガティブにもとれる）を読ませた。続いて、手がかり再生をさせたところ、参加者がプライムを思い出した場合は、後続の印象形成に対比効果がみられ、参加者がプライムを思い出さない場合は、後続の印象形成に同化効果がみられた。すなわち、参加者が呈示された刺激を意識していないにも関わらず、後続の印象形成にプライムの影響が観察されたことになる。

また、藤井・池田・上淵（2009）は、参加者に対し、課題用紙の左右に

印刷された数字マトリックスについて、左右で異なる場所を探してチェックするという課題を実施した。その後、コンピュータの画面に呈示される刺激が、画面中央よりも左側あるいは右側に現れたかを判断する課題と称して、実験群の参加者には達成関連語（e.g., 成功、達成）をプライム呈示し、統制群の参加者には中性語（e.g., 音楽、時計）をプライム呈示した。続いて、プライム呈示の前に行った課題を再度実施したところ、達成語を呈示された群は、中性語を呈示された群と比較して、課題遂行数が有意に上昇していた。このように、本人にはプライムを呈示されたという意識が伴っていないにも関わらず、後続の行動にも影響がみられたという研究が多く報告されている。

2. Implicit Association Test

自動性研究の台頭を受けて、近年、意識的なアクセスが困難な思考や感情を測定することへの関心が高まってきている（Nosek, Greenwald, & Banaji, 2007）。潜在的態度やパーソナリティに関する測度のレビューは、Fazio & Olson（2003）に詳しいが、本研究では特に、信頼性・安定性ともに優れ、個人差測定に十分に敏感であるとされる、Greenwald, McGhee, & Schwartz（1998）によって開発された潜在連合テスト（Implicit Association Test; 以下 IAT）について取り上げる。

IATが *Journal of Personality and Social Psychology* において発表されてから、12年が経過しようとしている。データベースである PsycINFO、PsycARTICLES、Psychology and Behavioral Sciences Collection を用いて、タイトルに「Implicit Association Test」が含まれる文献を検索すると、1998年から2010年6月までの間で、ヒットするのは230件（うち、査読付きの文献は208件）であった。また、abstractに「Implicit Association Test」が含まれる文献は860件（うち、査読付きの文献は756件）の該当があった。研究は海外において爆発的に増加し

ているといえるだろう。

一方、日本ではどうだろうか。データベースである CiNii を用いて、タイトルに「Implicit Association Test」が含まれる文献を検索すると、ヒットしたのはわずか 14 件（うち査読付きの文献は 2 件）であった。もちろん、文献のタイトルには含まれていないが、材料として使用している研究もあるだろう。同じく CiNii のフリーワード検索で「Implicit Association Test」を入力すると、42 件の該当があった。それでも海外に比して発表数、査読付きの論文ともに少ないことが分かる。しかし、近年は IAT の課題と将来性を検討するワークショップも日本心理学会の大会において継続的に開かれるなど、IAT が注目を集めていることが窺える。また、CiNii ではヒットしないが、学会の大会発表論文集などに掲載されている研究も多い。

本論に入る前に、IAT について説明しておきたい。IAT は、概念間の連合を間接的に測定する測度である。このテストにおける課題は、2 種類の反応選択肢を用いて、4 種類の概念のうち、関連する概念に刺激（次々と画面上に呈示される）を分類するものである。IAT の原理は、特定の 2 種類の概念間の連合が強ければ、同様の選択肢を用いて判断課題を行う際に、反応が容易になる（すなわち、反応時間が早くなる）というものである（Nosek, et al., 2007）。

標準的な IAT の手続きとして、ジェンダー IAT を例に挙げて説明する。IAT は、7 つの反応ブロックにおいて、2 種類の概念カテゴリー（e.g., 「男性」と「女性」）と 2 種類の属性カテゴリー（e.g., 「良い」と「悪い」）に関連する刺激語を、指示されたカテゴリーへ、できる限り早く分類するものである。ブロック 1 は 20 試行であり、呈示された刺激語が 2 つのターゲット概念のどちらに関係するか、それぞれ対応する 2 つのキー押しで分類する（e.g., ジェンダー IAT では、画面左側に示された「男性」カテゴリーに関する刺激語は「f」キーなど、キーボードの左側に位置するキーで分類し、画面右側に示された「女性」カテゴリーに関する刺激語は

「j」キーなど、キーボードの右側に位置するキーで分類する)。ブロック 2 も 20 試行であり、2 つの反応キーを用いて、呈示された刺激語がポジティブなものかネガティブなものかを分類する (e.g., ジェンダー IAT では、左に示された「良い」に関する刺激語は「f」キーで、右に示された「悪い」に関する刺激語は「j」キーで分類する)。ブロック 3 も 20 試行からなるが、ブロック 1 と 2 を組み合わせた課題に回答する。具体的には、画面左側に「男性」と「良い」が呈示され、画面右側に「女性」と「悪い」が呈示され、ブロック 1 と 2 で呈示された刺激語を、左側の 2 種類は「f」キーで、右側の 2 種類は「j」キーで分類する。ブロック 4 は 40 試行からなり、ブロック 3 と同じ内容の課題を行う。ブロック 5 は 20 試行からなり、ブロック 1 とは反対のキーを用いて回答する (画面左側に「女性」カテゴリーが示され、画面右側に「男性」カテゴリーが示され、それぞれ「f」、「j」のキー押しで、呈示された刺激語を分類する)。ブロック 6 は 20 試行であり、ブロック 3, 4 とは組み合わせが逆になった課題に取り組む (画面左側に「女性」と「良い」が示され、画面右側に「男性」と「悪い」が呈示され、ブロック 1 と 2 で呈示された刺激語を、左側の 2 種類は「f」キーで、右側の 2 種類は「j」キーで分類する)。ブロック 7 は 40 試行からなり、ブロック 6 と同じ内容の課題を行う。ブロック 3, 4 の組み合わせ課題とブロック 6, 7 の組み合わせ課題の平均反応時間を比較し、反応時間が早い組み合わせの方が、その参加者の中で連合が強いと考える (IAT の特徴についての近年のレビューや妥当性の検討は、Schnabel, Asendorpf, & Greenwald, 2008a, b に詳しい。また、IAT の得点化については、Greenwald, Nosek, & Banaji, 2003 を参照)。

3. IAT 研究からの予測

数々の IAT 研究から示されてきたのは、IAT を用いて測定される潜在的 (implicit) な自己概念と、従来から用いられている質問紙などで測定

される顕在的（explicit）な自己概念は、それぞれ質の異なる指標を予測するということである。たとえば、Asendorpf, Banse, & Mücke（2002）は、潜在的測度であるIATを用いて、参加者の潜在的なシャイネスを測定し、質問紙を用いて顕在的なシャイネスを測定した。そして、これらの潜在的・顕在的なシャイネスと、実験的に設定された対人相互作用場面におけるシャイ行動との関連を共分散構造分析によって検討した。その結果、IATから推定されたシャイネスの潜在的自己概念は、相互作用場面における非統制的なシャイ行動（自身の身体への接触、姿勢の緊張の程度）の多さを予測した。一方、質問紙から推定されたシャイネスの顕在的自己概念は、相互作用場面における統制的なシャイ行動（発話時間、説明を補うためのジェスチャーの程度）の多さを予測していた。対人相互作用場面によるシャイ行動ではなく、実験参加者の友人による他者評定という客観的な指標を用いて、この研究を追試したFujii, Tanaka, Noguchi, & Aikawa（2010）や相川・藤井（印刷中）も、同様の結果を得ている。これらの研究では、シャイネスの潜在的自己概念と顕在的自己概念という潜在変数の間に、一定の相関を見出している。この点に関連して、Schnabel et al.（2008b）は、数種類の自己概念を測定するIATを用いて実験を行い、潜在的自己概念と顕在的自己概念を区別しない1因子モデルと、両者を区別する2因子モデルの適合度を、共分散構造分析を用いて比較した。その結果、2因子モデルの適合度の方が優れていたことから、潜在的自己概念と顕在的自己概念は、一定の相関を示しながらも、区別されるものと述べている。

他にも、潜在的な自己概念と顕在的な自己概念から予測される行動の質が、それぞれ異なるという研究が数多く発表されている。たとえば、潜在的・顕在的不安（Egloff & Schmukle, 2002）、潜在的・顕在的自尊心（Rudolph, Schröder-Abé, Riketta, & Schütz, 2010）、潜在的・顕在的「暗黙の」知能観（藤井・上淵, 2010）などが挙げられる¹⁾。これらの研究では一貫して、潜在的な自己概念は統制が困難な行動指標と関連があり、

顕在的な自己概念は統制が可能と考えられる行動指標と関連があった。この結果は、Asendorpf et al. (2002) が提唱する二重分離モデル (double-dissociation model) に沿うものである。

顕在的測度からは予測されない、潜在的な自己概念によって予測される行動があるということは、介入可能性を考える際に重要であろう。たとえば、Baumeister, Campbell, Krueger, & Vohs (2003) は、単に自尊心を高める試みが、直接的によい結果をもたらすとは限らないという主張を展開しているし、自尊感情を高めることがあらゆる問題行動に対する万能薬であるという神話に対して批判もなされている (伊藤, 2002)。これらの議論を受けて原島・小口 (2007) は、IAT と質問紙を用いて参加者の潜在的・顕在的自尊心を測定し、分配課題を用いて、参加者が行う内集団ひいきの程度を測定した。その結果、顕在的自尊心が高く、潜在的自尊心が低い群ほど、防衛的行動 (この研究では内集団ひいきを指す) を行うという交互作用を検出した。潜在的な自尊心という自己概念も行動に影響していることを考慮すれば、潜在的な自己概念を変化させうる要因を発見することも、今後の介入研究において重要であるといえるだろう。本論文では、潜在的自己概念や潜在的態度の変容、あるいは介入可能性に言及している、もしくは示唆を与えると解釈できる研究や文献を紹介し、展望を試みる。

4. 海外における IAT 研究のレビュー²⁾

まず、海外における IAT 研究をレビューしていく。Rudman, Ashmore, & Gary (2001) は、2 種類の実験を行い、半期 (14 週間) にわたり、参加者に対し偏見や集団間の対立に関する教育を受けさせることで、黒人へ

1) 「暗黙の」と鍵括弧を付した理由は、Implicit と定義される概念を、質問紙などの顕在的測度で測定している点に対する議論があるためである (e.g., 藤井・上淵, 2010; Uebuchi & Fujii, 2010)。

2) 小林・岡本 (2004) は、顕在的測度と潜在的測度の特徴をレビューし、IAT 研究を多く紹介している。本論文は、そのレビューの一部も参考にしている。

のネガティブな志向が減少するか否かを検討した。

実験の結果は、アフリカ系アメリカ人の男性の教授が担当する、人種の多様性に関する教育プログラムに参加した学生は、そのプログラムの最後に測定された、反黒人的な態度を顕在的にも潜在的にも減少させたというものであった。さらに、ネガティブな顕在的態度の減少は、学生によるバイアスへの知覚や、自分の偏見を直したいという動機、すなわち認知的 (cognitive) な指標と相関していた。

一方、ネガティブな潜在的態度の減少は、黒人に対する恐怖の減少や黒人への友好感の増加、その教育プログラムを担当したアフリカ系アメリカ人の教授への好感度など、感情的 (affective) な指標と関連があった。これらのことから、Rudman et al. (2001) は、顕在的態度の変化は認知的・動機的なプロセスと関連し、潜在的態度の変化は感情的なプロセスと関連があることを示唆している。

また、Gamar, Schmukle, Luka-Krausgrill, & Egloff (2008) は、参加者に対し、介入を行う前に IAT を用いて潜在的不安を測定し、質問紙を用いて顕在的不安を測定した。事前のスクリーニングにおいて、社会的不安が高いとされた参加者に対し、訓練を受けたセラピストが介入を行った結果、参加者の潜在的不安・顕在的不安は両方とも、介入後に減少を示していた。一方、セラピストによるトレーニングを受けなかった統制群は、不安は減少していなかった。

これらの研究は、顕在的態度も潜在的態度も変化がみられたというものであるが、結果は一様ではない。たとえば、Williams, Case, & Govan (2003) は、ボルトスパラダイムを用いて実験群の参加者に排斥を経験させた後（統制群の参加者は排斥されなかった）、IAT（ヨーロッパ人 vs. アボリジニ／快な vs. 不快な）を用いて、人種的に対する潜在的態度を測定した。また、顕在的測度を用いて、顕在的態度も測定した。その結果、実験群、統制群ともに顕在的な態度には差がみられず、等しく受容的であったのに対し、実験群の参加者は、統制群の参加者に比べ、IAT に

おける「快な—ヨーロッパ人」「不快な—アポリジニ」の組み合わせ課題の反応時間が早かったことを報告している。すなわち、排斥を受けた参加者は、少数派の人種に対する潜在的な態度がよりネガティブになっていたことが示された。

また、Dasgupta & Greenwald (2001; 実験 1) は、黒人・白人という人種ステレオタイプについて潜在・顕在の両側面から検討している。黒人について、印象がポジティブな例 (e. g., デンゼル・ワシントン、エディ・マーフィー) を呈示され、印象がネガティブな白人の例 (e. g., ティモシー・マクベイ、テッド・バンディ) を呈示された実験参加者は、IAT で測定した自動的な向白人 (i. e., 白人に対する賞賛; 「白人—快な」の反応) 的態度が減少することと、黒人・白人の呈示の効果が 24 時間後も持続していたことを、24 時間後にも IAT と顕在指標を用いて態度を測定することによって確認した。一方、顕在的な態度には差がみられなかったことも示された。

Blair, Ma, & Lenton (2001) は、反ステレオタイプの強い女性を想像するようなメンタル・エクササイズを行った実験参加者は、統制群の参加者に比べて IAT で測定されたステレオタイプが減少したという結果を、5 種類の実験（そのうち 2 つの実験は GNAT (Go/No-go Association Task および虚記憶の測度を使用している) から報告した。しかし、ここで注意すべき点は、メンタル・エクササイズによってステレオタイプが消失したのではなく、他の群（統制、ステレオタイプ）と比較して減少した、という点である。すなわち、反ステレオタイプのメンタル・エクササイズを行った群も、IAT スコアは 0 からの差が有意（すなわち、潜在的にステレオタイプを抱いていると査定される）であった。

その他に、Uhlman & Swanson (2004) は、121 名の実験参加者に対し、敵を銃で撃つという暴力的なゲーム、または暴力的でないゲーム（麻雀）の一方を行かせた後、自己の暴力性に対する顕在的・潜在的評価を測定した。その結果、顕在的評価においてはゲームの種類による差はなかつ

たが、潜在的評価でのみ、「自己」と「暴力的」の連合が強くなっていた。

上記のように、顕在的態度においては変化がみられず、潜在的態度のみが変化（または、実験操作上の統制群と比較して差がみられた）したという研究も存在する。結果は一貫していないが、潜在的態度が変化する可能性を示した研究は少なくない。

5. 日本における IAT 研究のレビュー

続いて、日本で行われている研究を紹介する。

まず、藤井・上淵（2010）は、IAT と質問紙を用いて、学習者の動機づけに影響する概念である「暗黙の」知能観を潜在的・顕在的に測定した。この研究では、実験手続きとして、自己制御学習で用いられる方略を使用する困難な文章題を2度にわたり実施した。共分散構造分析の結果、潜在的な「暗黙の」知能観を測定する IAT が、課題成績の変化量を予測したのに対し、質問紙で測定した顕在的な「暗黙の」知能観は、成績と関連を示さなかった。このことから、潜在的な知能観を変容させる、あるいは影響を与える介入を行うことで、自己制御学習に効果が得られる可能性を示唆している。ただし、この研究は、得られたモデルから理論的な予測を展開するに留まっており、実際に介入することによる成果が得られるかどうかは精査が必要である。

続いて、実験操作によって後続の潜在的態度に差異がみられたという研究を紹介する。野寺・唐沢・沼崎・高林（2007）は、人が死を意識した際に、ステレオタイプ的な態度が強まるという恐怖管理理論（Terror Management Theory; Greenberg, Pyszczynski, & Solomon, 1986）を応用し、死生観を問う質問紙を用いて、参加者の死生観を活性化した（統制群に対しては、死生観質問紙ではなく食事に関する質問紙に回答させた）。続いて、参加者にジェンダーステレオタイプ IAT を実施したところ、実験群は統制群と比較して、潜在的なステレオタイプが強くなることを示し

た。先行する実験的操作によって、後続の IAT の結果に影響がみられたという結果は、前述の Williams et al. (2003) の研究とも一致する。

介入とは少し異なるが、特定のアルファベットや熟語を記憶することによって、記憶した対象への潜在的態度がポジティブになることを示した研究がある。たとえば、小川・廣田・松田 (2008) は、24 名の参加者に対し、5 種類のアルファベットを暗記させ、口頭で再認課題を行った後に、暗記させなかった 5 種類のアルファベットを含む IAT 課題（「あり—なし」と「良い—悪い」の組み合わせ課題）を行わせた。その結果、記憶したアルファベットに対し、潜在的な選好（「あり—良い」「なし—悪い」の組み合わせ課題の反応時間が、「あり—悪い」「なし—良い」の反応時間よりも有意に早かった）が観察された。

これを受けて Fujii & Shimakage (2010) や島影・藤井 (2010) は、アルファベットではなく、感情価がニュートラルであることが確認されている二字熟語（五島・太田, 2001）を用いて追試を行い、同様の結果を確認した³⁾。さらに、新たな試みとして顕在的な好みも IAT 課題前後において測定し検討を行ったが、顕在的な好みは IAT 課題前後では変化がみられなかったことを示した。

続いて、群間の比較ではなく、実験操作の前後において、顕在的・潜在的態度の変化を研究した例を紹介する。尾崎 (2006) は、参加者に対し、図形（楕円、四角）に対する好みを潜在的・顕在的測定（IAT・SD 法）を用いて尋ねたのち、楕円あるいは四角が描いてあるカードの束を一枚ずつめくり、カードに特定の図形が描かれていれば自身の近くに移動（接近）、それ以外の図形が描かれていれば遠くに移動（回避）するという評価条件づけの作業を繰り返させた。その後、再度潜在的・顕在的測定を用いて図形への好みを測定したところ、特定の図形（楕円）への潜在的好み

3) アルファベットには特定の感情価が含まれているとは考えにくいですが、小川他 (2008) では、特に予備調査などを行わず、アルファベットはニュートラルな刺激という前提のもとに実験を行っている。

が増していた。その一方で、カードを操作する課題を行う前後において、顕在的な好みには変化がみられなかった⁴⁾。この結果も、実験的操作によってIATの結果、すなわち潜在的態度に影響がみられたといえると同時に、プレテストとの比較から、潜在的態度も変容しうる可能性を示している。

最後に、煙草に対する顕在的・潜在的態度と、生理学的な指標との関連を検討した小林・平井（2009）の研究を紹介する。小林・平井（2009）は、禁煙外来に通院している患者を対象とし、煙草に対する顕在的態度、潜在的態度を3度にわたり測定した。その結果、顕在的指標（感情温度計、煙草のイメージ評定）は時間を追うごとに有意に低下し、自己報告による喫煙本数とも有意な関連をみせた。また、潜在的指標（「煙草—文具」「良い—悪い」のIATと、「煙草—文具」「自己—他者」のIAT）の得点は、「煙草—文具」「自己—他者」の得点が1回目と2回目の間で有意傾向ではあるが変化し、煙草と自己との距離が遠くなったと査定されたが、IAT得点は全体的に負の値（「煙草—自己」の組み合わせ課題の方が、「煙草—他者」の組み合わせ課題よりも反応時間が早い）をとっており、患者は自己と煙草との距離を近いと認識していたことが示された。しかし、1回目の「煙草—悪い」のIAT得点と、2回目の尿中ニコチンの濃度には有意傾向の相関がみられたほか、1回目において「煙草—良い」の連合が強い患者ほど、2回目の測定時のニコチン濃度が高かったなど、顕在的指標は自己報告による行動指標と関連し、潜在的指標は自己報告によらない生理学的な指標と関連していることが示された。

このように、例は数少ないながらも、潜在的な自己概念の変容可能性およびその影響について言及したものや、潜在的態度の変容を実証した研究

4) ただし、潜在的な好みの増加は楕円のみに見られ、四角の好みは増加していなかった。尾崎（2006）は、カードの操作前のIAT課題において、楕円よりも四角の好みが有意に低かったことから、もともと好みが高い対象に対しては、潜在的態度も変容しにくいと考察している。したがって、たとえば偏見や恐怖症のような、既存のネガティブな潜在的態度も変容しにくいと考えられるとし、さらなる検討が必要であると結論づけている。

も存在する。

6. まとめと今後の展望

顕在的測度と潜在的測度が関連する対象が異なることは、種々の研究から明らかにされている。本研究では、潜在的態度に焦点を当てた研究のレビューを試みた。その結果、介入によって顕在的・潜在的態度の両者が変容する場合と、潜在的態度のみが変容する場合の2パターンが多く報告されていた。もちろん、顕在的な態度変容に関する文献は説得研究などの文脈でも多くみられているが、これらの研究群において潜在的測度を用いているものは少なく、態度変容に関する指標は自己報告のみで測定されることが多い（e.g., 長津・相川, 2009; 山浦・坂田・黒川, 1997）。

特に、尾崎（2006）の結果が示すのは、図形に対する潜在的な選好のみ変化がみられたという結果であり、Fujii & Shimakage（2010）や島影・藤井（2010）でも、記憶した熟語について、顕在的な好みには変化がみられない一方で、潜在的な選好が観察されている（この研究で用いられたIATのプレテストは実験手続き上、実施することは不可能であるため、ここでいう潜在的な選好は「好みの変化」を意味するものではない⁵⁾）。これらの知見を踏まえれば、潜在的態度が変容する可能性はあるといえるだろう。本レビューは、IATという潜在的測度を用いた研究を例に挙げ、潜在的自己概念や潜在的態度が変容する可能性について言及した。しかし、本レビューで多くのIAT研究を網羅できたわけではなく、また潜在的態度が変容するメカニズムが明らかにされたわけではない。逆に、潜在的態度を規定する要因を探るという研究アプローチもあるだろう。更なる研究

5) 尾崎（2006）では、参加者が、評価条件づけの操作を行う前に回答した顕在的測度による好みの評定値を記憶していた可能性も考えられる。ゆえに、顕在的測度の回答に差が見られなかったからといって、顕在的態度が変容していないと言い切るのは難しいかもしれない。しかし、本質は「潜在的な態度が変容した」という点であり、この研究には十分なインパクトがある。

の発展が待たれるところである。

引用文献

- 相川充・藤井勉（印刷中）. 潜在連合テスト（IAT）を用いた潜在的シャイネス測定
の試み 心理学研究, **82**.
- Asendorpf, J. B., Banse, R., & Mücke, D. (2002). Double Dissociation Between
Implicit and Explicit Personality Self-Concept: The Case of Shy Behavior.
Journal of Personality and Social Psychology, **83**, 380–393.
- Bargh, J. A. (1990). Auto-motives: Preconscious determinants of social
interaction. *Handbook of motivation and cognition: Foundations of social
behavior, Vol. 2* (pp. 93–130). New York, NY US: Guilford Press.
- Baumeister, R., Campbell, J., Krueger, J., & Vohs, K. (2003). Does high self-
esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or
healthier lifestyles? *Psychological Science in the Public Interest*, **4**, 1–44.
- Blair, I., Ma, J., & Lenton, A. (2001). Imagining stereotypes away: The
moderation of implicit stereotypes through mental imagery. *Journal of
Personality and Social Psychology*, **81**, 828–841.
- Dasgupta, N., & Greenwald, A. (2001). On the malleability of automatic
attitudes: Combating automatic prejudice with images of admired and
disliked individuals. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 800–
814.
- Egloff, B., & Schmukle, S. C. (2002). Predictive Validity of an Implicit
Association Test for Assessing Anxiety. *Journal of Personality and Social
Psychology*, **83**, 1441–1455.
- Fazio, R., & Olson, M. (2003). Implicit Measures in Social Cognition Research:
Their Meaning and Use. *Annual Review of Psychology*, **54**, 297–327.
- 藤井勉 (2010). 「暗黙の」知能観と社会的望ましさの関連—他の特性との関連も交
えて— 学習院大学人文科学論集, **19**, 151–162.
- 藤井勉・池田倫子・上淵寿 (2009). 達成動機づけにおけるプライミング効果 東
京学芸大学紀要 総合教育科学系, **60**, 131–139.
- Fujii, T., & Shimakage, M. (2010). Implicit preference to studied compound
words. Poster presented at the 8th Tsukuba International Conference on
Memory, Tsukuba, Japan.
- Fujii, T., Tanaka, C., Noguchi, Y., & Aikawa, A. (2010). An attempt to
measure implicit and explicit shyness. Poster presented at the 27th

- International Congress of Applied Psychology, Melbourne, Australia.
- 藤井勉・上淵寿（2010）. 潜在連合テストを用いた暗黙の知能観の査定と信頼性・妥当性の検討 教育心理学研究, 58, 263-274.
- Gamer, J., Schmukle, S. C, Luka-Krausgrill, U., & Egloff, B. (2008). Examining the dynamics of the implicit and the explicit self-concept in social anxiety: Changes in the Implicit Association Test-Anxiety and the Social Phobia Anxiety Inventory following treatment. *Journal of Personality Assessment*, 90, 476-480.
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (1986). The causes and consequences of a need for self-esteem: A terror management theory. In R. F. Baumeister (Ed.), *Public self and private self*. New York; Tokyo : Springer-Verlag. pp. 189-212.
- Greenwald, A.G, McGhee, D. E, & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring Individual Differences in Implicit Cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480.
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and Using the Implicit Association Test: I. An Improved Scoring Algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 197-216.
- 五島史子・太田信夫（2001）. 漢字二字熟語における感情価の調査 筑波大学心理学研究, 23, 45-52.
- 原島雅之・小口孝司（2007）. 顕在的自尊心と潜在的自尊心が内集団ひいきに及ぼす効果 実験社会心理学研究, 47, 69-77.
- 池上知子（2001）. 自動的処理・統制的処理—意識と無意識の社会心理学 唐沢穰・池上知子・唐沢かおり・大平英樹（著）社会的認知の心理学—社会を描く心のはたらき—ナカニシヤ出版, pp. 130-151.
- 伊藤忠弘（2002）. 自尊感情と自己評価 船津衛・安藤清志（編）自我・自己の社会心理学 北樹出版, pp. 96-111.
- 小林知博・平井啓（2009）. 禁煙外来患者の煙草に対する潜在的・顕在的態度の変化と禁煙行動との関係 日本社会心理学会第50回大会・日本グループダイナミックス学会 56回大会合同大会発表論文集, 180-181.
- 小林知博・岡本浩一（2004）. IAT（Implicit Association Test）の社会技術への応用可能性 社会技術研究論文集, 2, 353-361.
- Newman, L., & Uleman, J. (1990). Assimilation and contrast effects in spontaneous trait inference. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 16, 224-240.
- 野寺綾・唐沢かおり・沼崎誠・高林久美子（2007）. 恐怖管理理論に基づく性役割

- ステレオタイプ活性の促進要因の検討 社会心理学研究, **23**, 195-201.
- Nosek, B. A., Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (2007). The Implicit Association Test at Age 7: A Methodological and Conceptual Review. In J. A. Bargh (Ed.), *Social psychology and the unconscious: The automaticity of higher mental processes*. New York, NY, US: Psychology Press. pp. 265-292.
- 長津麻衣・相川充 (2009). 順態度的メッセージにおけるボライトネスが態度変容に及ぼす影響 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, **60**, 123-130.
- 小川時洋・廣田昭久・松田いづみ (2008). 学習項目に対する潜在的選好: 潜在連合テストを用いて 基礎心理学研究, **26**, 167-171.
- 尾崎由佳 (2006). 接近・回避行動の反復による潜在的態度の変容 実験社会心理学研究, **45**, 98-110.
- Rudman, L., Ashmore, R., & Gary, M. (2001). 'Unlearning' automatic biases: The malleability of implicit prejudice and stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 856-868.
- Rudolph, A., Schröder-Abé, M., Riketta, M., & Schütz, A. (2010). Easier when done than said!: Implicit self-esteem predicts observed or spontaneous behavior, but not self-reported or controlled behavior. *Zeitschrift für Psychologie/Journal of Psychology*, **218**, 12-19.
- 島影麻耶・藤井勉 (2010). 熟語の潜在的選好に関する基礎的研究 日本社会心理学会第51回大会発表論文集, 234-235.
- 下條信輔 (2008). サプリミナル・インパクト—情動と潜在認知の現代 ちくま書房
- Schnabel, K., Asendorpf, J. B., & Greenwald, A. G. (2008a). Assessment of individual differences in implicit cognition: A review of IAT measures. *European Journal of Psychological Assessment*, **24**, 210-217.
- Schnabel, K., Asendorpf, J. B., & Greenwald, A. G. (2008b). Understanding and using the Implicit Association Test: V. measuring semantic aspects of trait self-concepts. *European Journal of Personality*, **22**, 695-706.
- Uebuchi, H., & Fujii, T. (2010). "Implicitness" of Implicit theories of intelligence: The problem of measuring implicit theories. Poster presented at the 27th International Congress of Applied Psychology, Melbourne, Australia.
- Uhlmann, E., & Swanson, J. (2004). Exposure to violent video games increases automatic aggressiveness. *Journal of Adolescence*, **27**, 41-52.
- 山浦一保・坂田桐子・黒川正流 (1997). 少数派説得者の専門性と協同の呼びかけが受け手の態度変容に及ぼす影響 広島大学総合科学部紀要IV理系編, **23**, 155-

163.

Williams, K. D., Case, T. I., & Govan, C. L. (2003). Impact of Ostracism on Social Judgments and Decisions: Explicit and Implicit Responses. In J. P. Forgas, K. D. Williams, & W. von Hippel (Eds.), *Social Judgments: Implicit and Explicit Processes*, New York: Cambridge Univ. Press, pp. 325–342.

（心理学科 助教）